
これはネギマですか？いいえ、原作崩壊ルギマです

mike

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはネギですか？いいえ、原作崩壊ルギまです

【Nコード】

N2139K

【作者名】

m i k e

【あらすじ】

ある一般人がネギの弟に転生して原作ブレイクする話です。

始まり始まり（前書き）

この作品は転生モノです。

オリ主がほどほどに最強です。

ハーレムモノです。

バトルより、日常と恋愛を大切にします（たぶん）

更新速度は不安定です。

それでも暇つぶしぐらいにはなるだろうって思っている人だけどうぞ

始まり始まり

「主席卒業生、ルギ・スプリングフィールド」

「はい」

おっす、俺はルギ、ネギの弟で、俗に言う転生者です。
神様に間違っただけで殺しちゃった。てへっ☆
って感じで謝られて転生しました。

ちなみに転生特典は一つしかありませんでした。
生き返っただけでもお得なのだから、あまり無茶言うなって怒られました。

ちなみに、貰った能力は『アンサーアンドトーカー』です。
簡単に説明するなら、『あらゆる問題の答えを出せる程度の能力』
って感じです。

わからない人は『金色のガッシュ!! W i k i』でぐぐって
くれ。

そんなこんなで、もう卒業式が終わっているな。
それでは、どこで修行することになるのか確認しますか。

「えっと、日本で教師をすることっか」

「ルギも僕と同じだね、今度は僕が一番になるから、負けないよ」

「まあ、適度にがんばってくれ」

「それにしても、ルギもネギも先生をするだなんてなにかの間違いじゃないの」

「そうです。二人ともまだ10歳にもまだなってないのに」

「まあ大丈夫だろ、修行先の学園長は僕の友人だからな、二人ともがんばれよ」

「はい」

「まあ、ほどほどにな」

それでは原作に介入を開始しますか。

日本に着いて

そんなこんなで日本に着きました。

現在ネギがアスナに喧嘩売っています。

「あゝ兄さん兄さん、初対面の人にいきなりそれはないでしょう」

「なっ、餓鬼がもう1人」

「こんにちはお姉さんがた、自分はルギと言います。お近づきの印にこのチョコレートをどうぞ、イギリスの有名店のチョコですよ。そちらの髪が黒いお姉さんもお一つ如何ですか」

「ふっいいわね、一個貰うわ」

「あっうちも貰ってええの、ありがとう」

怒っている人間はおいしい物で釣るに限ります。昔の人も鬼や龍を鎮めるために食べ物や飲み物で釣りましたしね。

「うん、あまゝい」

「おいしいなあゝ」

「よろこんで頂けて光栄ですよ、それにお菓子も綺麗な女性に食べてもらった方が嬉しいでしょうし」

「やだ、ちょっと、なに言っているのよ」

「おませさんやな」

「いえいえ、英国紳士として当然のことを言ったまで、それにこの程度、自分の国では挨拶のようなものですよ。綺麗な女性を褒めるのが英国紳士の務めですから」

アスナとこのかはにやけながらチョコレートを食べている。うん、やはり日本人は褒められることに慣れていないな。転生前の保険のセールスマンとしての能力を活用できそうだ（ゴマをすれる程度の能力）。

「やあ、ネギ君にルギ君、おはよう」

「あつタカミチ」

ネギはパタパタとタカミチに駆け寄っていく、やっぱ子どもだな。

「おはようございますタカミチさん」

「ルギ、タカミチ先生と知り合いなの」

「はい、父の知り合いでして、ネギは遊んでもらったこともあるので、タカミチさんに懐いているのです」

「そうなんだ」

「それじゃあ、学園長室まで行こうか、明日菜君と木乃香君も一緒に」

「ええ!! こんな子どもが教師って、正気ですか!？」

常識的に考えればそうだな、労働基準法とか違反しまくりだろうに。

「それでは、ルギ君は残っとくれい。君の住む場所と担当教科の事も話さないといかんしの。あ、ネギ君、このかの婿にならんか？」

それを聞いてこのかが学園長の頭をハンマーで強打していた。生身の人間にそんなことして、この娘は大丈夫なのだろうか、精神的な意味合いで、まあそれでも追撃は必要か。

「このかさん、この手の人間に肉体的なダメージは意味ないですよ。もっと精神的にダメージを与えないと同じ目に会いますよ」

「そうなんか、でも、それってどんなことをすればええんやろ」

「おじいちゃんって呼ばないで、コノエモンって呼べばいいと思いますよ。温い感じはしますが、お年寄りには結構効果がありますよ」

「そうかあ、じゃあ、おじいちゃん、次お見合いさせたら、一生コノエモンって呼ぶわあ」

「ほお、このか」

「それじゃあ、失礼しますう」

そう言い残し、このかはネギとアスナを連れ部屋を出て行った。

「それでは、学園長。住む場所と担当教科の話をしましょうか」

「ほお、ああしようじゃの、しかしルギくん、このかに入れ知恵するのはどうかと思うのじゃが」

「いや、自分と同じような思いをしている娘さんをみて親近感が沸いたのでつい。でも、学園長がお見合いをさせなければ、このかさんはずっとおじいちゃんと読んでくれますよ」

「そうじゃが」

「まあその話はまた今度で、今は決めなければいけないことの話をしてしましよう」

「うむ、わかった。では、担当教科は何にしようか、ネギくんの補佐をしてもらおうか、それとも別のか」

「数学の科目を担当したいのですが」

俺は学園長の声を遮って、言葉を上げた、ネギの尻拭いなど真っ平ごめんだ。

「ほお、それじゃあ担当科目は数学と、あと住む場所は」

「それは、今日生徒に会って私から頼んでみます。学園長からの強制ではなく生徒に掛け合ってからの方がいいでしょうから」

「そうか、では、そうしてもらおうか」

さて、そろそろ手札を切ろうか、原作によりよく介入するために。

「では最後に、この手紙を読んでいただきたいのですが」

「ふむ、・・・!!、これは」

「はい、我が父、サウザンドマスターからの親書です」

原作ブレイクの足音が聞こえる

「確かに、ナギの筆跡に拇印じゃった」

学園長は俺から手紙を受け取り読んだあと、すぐさま筆跡と手紙に押されていた拇印を確認した。

確認に結構な時間を要したため、俺はクラスに迎えず。すでに3時間経過している。

「はい、よって父に封印された吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの封印を解きます。もともと、父により封印されたのですから、父の願いによって封印を解かれるのが筋でしょう」

「しかし、ルギくんこの手紙をいつ受け取ったんだね」

「タカミチさん、この手紙は私の故郷が悪魔の手によって崩壊した晩に父から受け取りました。まあ中身は確認していないのでどんな文章で書かれているのか解りませんが、内容は先ほどのような通りでしょう」

「そうなの、して、どのようにして封印を解く、あの呪はナギが全力でかけたため誰にも解けないのだが」

「準備はしてあります。まず、MS，マクダウェルを呼んではいただけませんかでしょうか」

「あい、わかった」

「なんだ爺、授業中に念話で呼び出しよって」

「それなんだが」

爺説明中

「小僧、本当か」

「はい、マクダウエルさん、あと私はルギ・スプリングフィールドと申します、呼ぶ際はルギと呼んでください」

「ああ、ルギ、私もエヴァでいい、貴様は弟の方とはえらく違うんだな」

「エヴァさん、教室でエヴァさんに挨拶したのは兄ですよ」

「ええ、あっちが兄なのか、お前はずいぶんとできがいい弟だな」

「それほどでもありません、それじゃあ、解呪方法の説明をしてもいいですか」

「ああ、頼む」

「はい」

俺は今居を但し、エヴァとコノエモンとタカミチに説明した。

「まず、エヴァさんにはこれを飲んでもらいます」

俺は鞆から茶色の小瓶を取り出した。

「それはなんだ」

「私の血です。まあこの程度量ならエヴァさんの魔力を雀の涙ほどしか回復させないのですが、これは童謡の魔法の小瓶と同じ小瓶なのです。つまり、中身が減りません」

「なんだと!!」

「つまり、無限に近い量で私の血を摂取してもらいます。私の血をたくさん飲んだ上で、エヴァさんが自身で呪を解く、加えて、私も自分の血を媒介に呪を解きます。」

「なるほど、つまり、外と内、両面から解呪するのじゃな」

「はい、さすがにこれだけすれば呪いも解けるでしょう」

「ふふ、ははは、ふははは、解ける、解けるぞ。ついに忌々しいこの呪いから解き放たれる。ふはははは、あっははははははは」

「但し、この小瓶をお渡しするには条件があります」

この言葉を受け、エヴァは俺をめがっさ睨んできた。
やばい、ちょっ怖い。

「小僧、今なんと言った」

俺は、今すぐお前を殺して小瓶を奪うぞと言っている目を睨み返

しながら答えた。

「この小瓶をお渡しするには条件があると申しました。条件を言ってもよろしいでしょうか」

「構わない」

「ありがとうございます。では、条件は3つあります。

1つ目は呪いが解けても私が学園にいる間はここに滞在してください。県外や海外にでかけても構いませんが、授業や学園の行事にはきちんと参加してください。

2つ目は私に稽古をつけてください。私の父は英雄、つまり多くの敵を持つ存在です。そんな敵から自分を大切な人を守るために力をつけなくてはいけない、なので最強の魔法使いの貴方に師事をしていただきたい。

そして、3つ目は、私と仮契約をしていただきたい。仮契約は私が従者の方で、貴方との契約ならより良いアイテムを手に入れられるはずなのでしていただきたいのだが、よろしいでしょうか」

「・・・いいだろう、契約してやる。貴様はなかなか歯ごたえがありそうだ。いい暇つぶしができそうだよ」

「ありがとうございます。あと、もう1つありました。私は現在いえなき子なので、一緒に住んでもいいですか」

「はっ、お前、住処が決まってないのか」

「はい、御恥ずかしながら、こちらには来たばかりで、滞在する場所が決まっていらないのですよ」

「そうか、まあ弟子でもあるしな、いいだろう、私の家に住まわせてやる、ありがたく思えよ」

「はい、ありがとうございます、エヴァさん。学園長もいいですね」

「ふおふお、まあいいだろう」

「ありがとうございます。ちなみに解呪は次の満月の晩にしましょう、万全を期すために」

「わかった。それじゃあ、今から家を案内してやる。付いて来い」

「はい、それでは、学園長にタカミチさん、失礼します」

俺は部屋を出て、エヴァに付いて行った。

のどかキャッチ

エヴァについて学園を歩いていると、広場に出た。

「この学園って綺麗なところですね」

「ああ、金をかけているみたいだから、それとルギ、二人の時はもっと碎けた感じで話せ、そんなんでは肩がこる、呼ぶときもさんはいらん」

「了解、エヴァ」

ふと、周囲を見渡すと、広場に繋がる階段にふらふらとたくさん
の本を抱えた少女がいた。

って、どのかかよ!!

「ん、どうし」

「間に合え」

俺は無詠唱で『戦いの歌』をかけ走り出し、階段から落ちたのど
かを抱きかかえた。

「ギリギリセーフ」

「ルギ!!」

後ろにネギがいるけど今は無視。

「お姉さん、大丈夫ですか」

「うう、あれ、わたしは」

「階段から足を滑られて堕ちたのですよ、怪我はありませんか」

「ひゃい、大丈夫です」

「それはよかった」

俺はお姫様抱っこしているのどこかを立ち上がらせた。
ついでに、落ちている本も拾い5冊をのどかに渡す。

「はい、こんなに一気に運んで危ないから、一緒に運びますね」

「いえ、でも」

「駄目ですよ。一度あることは二度あるんですから」

さらにこちらに近づいてきたエヴァにも3冊渡す。

「エヴァさん、ちょっと寄り道する用事が出来ました。手伝っても
らえますか」

「いや、お前もう渡しているのだが」

そして俺は7冊持って立ち上がる。

「それじゃあ、お姉さん、この本はどこに運べばいいんですか」

「えっと、それじゃあ、こっちです」

俺とエヴァはのどかに付いて行った。

で、そんなこんなで、ネギの歓迎会にも参加して、そこで自分が副担任であることも説明して、エヴァの家に着いたのは夜の8時を回ってからです。

「ふっ、今日は疲れた」

「それでしたら、お風呂が沸いております。入っている間にベッドメイキングはしておきますので、すぐにお休みになれますよ」

さすが、高性能ロボメイド、痒いところに手が届く。だが。

「そうしたいのは山々なんだけど、重要な話があってね、すまないけどエヴァを呼んでくれない。リビングにいるから」

「かしこまりました」

さて、ここから勝負だ。

ここで、うまくエヴァを口説けるか、勝負。

「で、何のようだ。私も疲れているから早く風呂に入って寝たいん

だが」

「ごめんエヴァ、でも、これからの話は重要な話だから心して聞いて欲しいのだけど」

「いいだろう、それほどまでに重要なのか」

「かなり重要、俺の人生を左右するほどにね、そんな訳で茶々丸、この部屋は盗聴や盗撮はされていない」

「はい、されておりません」

「了解、じゃあエヴァ、茶々丸にこの部屋を出て、そしてこの部屋での会話を見聞きしないようにと命令してくれない。この話はエヴァにしか出来ないから」

「わかった。茶々丸下がれ、そして、この部屋の会話を決し着て聞くな」

「かしこまりました」

そう言って、茶々丸は部屋を出た。

「これでいいか」

「うん、問題ないよ、ありがとう、エヴァ。それじゃあ、本題を話すよ」

俺は一呼吸置いてからエヴァを見据え、告げた。

「今日、学園長に見せた手紙、あれ、偽物だから」

ルギが5日をかけて偽手紙作成をやってくれました

「はっ？」

エヴァは理解できないという顔をして俺の方を見つめている。

「もう一回言うよ。今日、学園長に見せた俺の父、サウザンドマスターことナギ・スプリングフィールドの手紙は偽物だよ」

「貴様なにを言って」

「たぶん、親父はエヴァのことなんて覚えていない。エヴァをここに封印したことなんて気にも留めていないと思う」

「きさまあああああ！！」

エヴァは俺に馬乗りになり首を絞めた。

「じゃあ、あの手紙は何だ。奴の拇印まで押してあったあの手紙は何だ」

「あれは偽物、だって作ったの俺だもん」

「なにおいって」

「親父の筆跡は、メルディアナ魔法学院に忍び込んで昔の親父のテストを見て筆跡を真似た。拇印は、入学書の所に押してあったから、それから指の大きさを予測して、人間の指と同じ弾力を持つゴムを削って指の形にしてから、そのゴムに指紋と同じような窪みを彫っ

た。はい、証拠のゴム」

俺はポケットの中から指紋の掘られた指型のゴムを出した。

「そんなことできるわけ」

「できるよ、時間さえかければ誰だって出来る」

「でも、そんなことをして貴様に何の得が」

「ある、得はあるよ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。それは君を自由にして上げられるということだ。親父に封印され、君にとって敵地のど真ん中に置いてけぼりにされ、いつ襲われるかもわからないという不安で、夜も眠れない日が続いたんじゃないか」

「うるさい黙れ、貴様に、貴様が知ったような口を叩くな」

「そうだね、俺は君の生活を何も知らない、確かに知ったような口を叩いている。でもね、君が親父のせいで不幸になっているかも考えると、いてもたってもいられなかった。君の封印を解いて上げたかった。なぜだか解るか？」

「そんなの知るか」

「恐いんだ」

「恐い？」

「俺はね、エヴァ。君が恐いんだ」

「ならばなぜ、封印を解く、恐ろしい存在の力を上げるなど馬鹿な行いだ」

「違うよ、エヴァ、問題はそこじゃない」

「なに？」

俺はエヴァの頬に手を添えて答えた。

「俺は、エヴァに復讐されるのが恐いんだ。俺の住んでいた村は昔、悪魔に襲撃されて村人全員が殺され石にされた。復讐されたんだ。親父を恨んでいた人に、親父を憎んでいた人に、親父が英雄だったせいで、俺の村は滅ぼされた」

「償いのつもりなのか」

「いや、償うんだ。親父の罪の全てを償い、そして、俺の姉や周りの人が復讐されない環境を作る。そのために力が要るだから、エヴァの呪いを解くことを約束した」

「罪を気にしていたら、人間は生きていけないぞ」

「俺の罪はいいんだ。所詮、人間1人分の罪だ。けど、親父の罪はまずい、親父は英雄だ。英雄の罪は巨悪を呼び寄せる。それは親父以外の無関係な人間を殺す。その巨悪が恐いんだ」

「だからお前は悪に許しを請うのか、謝って償って、相手が許してくれるのを待つのか」

「戦いは自分の尻尾を加えた蛇だ。罪を清算しなければ、連鎖はと

まらない。滅ぼしても別の敵を呼び寄せるだけだ。この世には正義も悪もない、正義の相手は別の正義だし、悪の相手も別の悪だ。この世に、善だけの存在はいない、同時に悪だけの存在もない。悪を殺すということをその悪の内包する善も殺すことだ。だから、親父の罪は償わなければ、俺の姉や周りの人はおちおち眠ることも出来ない」

「そのために、私の封印を解くと」

「そうだ」

「それでは、もし、封印を解いただけでは許さない。お前の命が欲しいと、私が言ったらお前はこうする」

「正直な話、かなり困る。俺は罪を償うが、俺の命や他人の命を犠牲にするつもりは無い。しいていうなら、親父の命をやるから許してくれて感じだな」

「はあ？」

「だから、罪は償うけど、命とか対価として差し出さないよ。差し出したら、俺の姉や周りの人が復讐者になる。それは駄目だ。」

「つまり、お前はあれか、罪は償うにしても出来る範囲でしか償わないのか」

「そうだ、というか当たり前だ。そんな無茶な要求されても償えるか、どっちかという俺がある程度のことまでするから、俺の周りは狙わずに、親父だけを狙ってくれと説得するぐらいだ。んで、説得するには仲良くななくちゃいけない。だからある程度の願いは

叶えるんだ」

「……なんか、途中まで悲劇、英雄の影って感じでかつこよかったのに、今はくだらない小悪党のように感じるのだが」

「気のせいだ。というか親父の付けをどうして俺が払わなくちゃならない、親父は生きてるんだから、親父に払わせるさ」

エヴァは首に添えていた手を離し、俺の手を引き立ち上がらせた。

「なんというか、お前もナギと同じ用な性格だな」

「それを言われると萎えるな、気に食わない」

「まあいい、でも、お前の願いは気に入った。勝手に罪に溺れて溺死するような人間に比べて100倍親近感が沸く、それにお前の考えは面白い、つまり、私の怒りはお前やお前の親族や周りの人間ではなくナギにぶつけろと言いたいわけだ」

「そうだ」

「で、お前はそうするために、ナギに怒りを持つものを説得すると、適度に願いを叶えて仲良くなることで」

「その通り」

「いいのか、ナギはそいつらに殺されるぞ」

「大丈夫だろ、親父は襲われても返り討ちにする。それ故に英雄だ」

「くくくつ、ははは、ふっはははっははははは、面白い、面白いぞ、ルギ・スプリングフィールド。いいだろう鍛えてやる。お前の願いをお前の夢を実現できるように、私がお前を鍛え上げよう、この最強の悪の魔法使いが、お前を究極の魔法使いへと鍛え上げよう」

「ああ、期待している。それと」

「んっ？」

「エヴァの封印を解く理由はもう一つあるんだ」

「なんだ？」

俺はエヴァに近づき、エヴァの右手を両手で握って、灰色の目を見つめながら答えた。

「エヴァを始めて見たとき、綺麗なかわいいって思った。あれだ、一目惚れって奴だな、この娘の願いを叶えてあげたいって思ったんだ」

「なっ、なにをバカなことを」

「本気だよ、エヴァ、だから」

俺は魔力を流し、魔方陣を完成させる。

「これは契約陣、仮契約するつもりか」

「もちろん、エヴァが主で、俺が従者。契約するよ、目を瞑って」

エヴァはキュッと目を瞑っている。俺は不覚にもその仕草がとてもかわいいと思った。

「エヴァ、君の気持ちはまだ聞かない、でも、覚えておいて、俺が君を好きだということを君の願いを叶え、少しでも幸せにするために来たということを」

そう言って、俺はエヴァの唇に口付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139k/>

これはネギマですか？いいえ、原作崩壊ルギマです

2010年10月8日11時53分発行